

UECHI



上地の全景



キジムナー広場

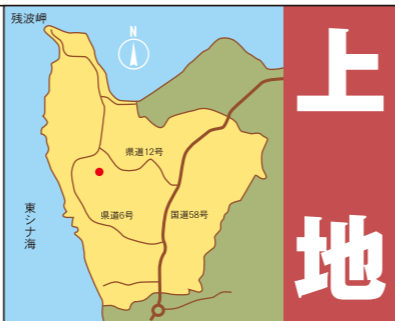
上地地域には久しく児童公園、ゲートボール場等がありませんでしたが、池ノ上土地改良事業によって集落南側に集積地が生み出されました。二〇〇二年、その場をみんなの憩いの場「キジムナー広場」として整備しました。ここでは、地域の子どもからお年寄りまでみんなが憩える広場として、緑豊かな広場づくりと、さらには集落内の緑化・花いっぱい運動の取り組みがなされています。

キジムナー広場が コミュニティの拠点

キジムナーとは、沖縄に伝承される想像上の生き物である妖怪を言います。その姿は赤面で赤頭髪、小童であり、古い大樹の穴に住むといわれています。そのキジムナーの個性豊かな愛嬌にあやかり、明るく楽しく過ごせる、遊び心のある地域コミュニティをつくらうと取り組んでいます。



キジムナー広場の清掃



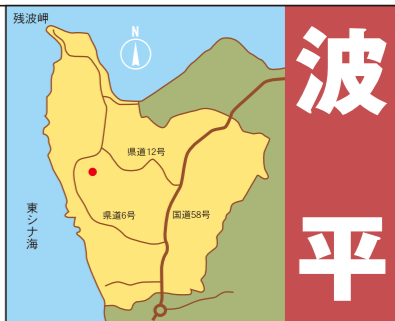
上地

プロフィール

上地は、村内でも歴史的に古い集落で、『絵図郷村帳』（一六四六年）に「上地村」と記されています。かつて上地は北側の小高い所に集落移動をしたことがあり、そこを上地古島と呼んでいます。この集落移動について『球陽』巻二十二によると、上地は瘦せ地の村で、地理風水師の見立て

に従い志良志原に移動したのが一七四七年でした。その後元集落にもどりたい旨を王府に請願し、一八五八年に復帰して現在にいたっています。古い集落のため拝所や井泉も多く、『琉球国由来記』（一七一三年）によると、座喜味ノロによって神アサギや御嶽にて祭祀が執り行われていました。戦後の一時期、上地は三線の産地として知られ、ほとんどの婦人が内職で三線の額を巻く布

NAMIHIRA



波平

プロフィール

波平は、歴史的にも古い集落で、『絵図郷村帳』（一六四六年）・『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）では「はびら村」とあります。波平村創設にあたって、多和田兄弟と七世帯が加わり村を作ったとの伝承が残っています。

一九四五年四月二日、米軍の沖縄上陸に備えて、波平地区の住民一四〇人が避難していたチビチリガマでは女性・子どもを中心とする八五人が「集団死」に追い込まれるという悲劇に見舞われました。一方、約一・五キロ離れたシムクガマにも約一千人が避難していましたが、ハワイ移民帰りの男性二人が住民を説得した結果、米軍上陸直後の攻撃で死亡した三人を除く全員が捕虜となり生き残りました。

沖縄戦後集落南西側は楚辺通信所、海岸部は波平陸軍補助施設として接収されました。同補助施設は七四年に返還され、県道六号線沿いに県・村の福祉施設が数多く建てられました。現在は集落も南地区への広がりを見せ、県道六号線沿いの大当地区では新たな商業地としての市街地が形成されつつあります。

波平は、古くから公民館を拠点に住民が一致して、祭祀や行事等の諸活動を展開しています。波平南側を前島（メーシマ）と呼び、軍用地（楚辺通信所）に接収されて久しくなっていました。二〇〇六年、同施設が金武町への移転に伴い返還となりました。現在は、楚辺通信所返還跡地利用地主会を中心に返還軍用地の跡地利用に向けた取り組みが進められています。



2010年7月完成 波平公民館

平和のメッセージを発信

沖縄戦時、「集団死」が起こったチビチリガマの「世代を結ぶ平和の像」の建立を通して、平和のメッセージを全国に発信し、波平の戦後史は大きな転換期を迎えました。チビチリガマでは悲惨な「集団死」によって尊い命が失われました。一方、シムクガマに避難した人々は生還し、この二つのガマは沖縄戦の明暗を分けた数奇な歴史を刻んでいます。沖縄戦終結五〇周年を期して両ガマにはモニュメントが設置されました。今後も沖縄戦の悲惨さを伝え、平和を願う情報発信地となることでしょう。



伝統ある「波平棒」

アガリジョーが拠点

波平は、現在でも根屋（ニーヤ）をはじめとする御願や各種の伝統行事が引き継がれ、アガリジョーで行われる「十五夜」（観月会）は盛大で獅子舞や舞踊など三〇演目が青年たちによって受け継がれています。こうした民俗文化、伝統行事などへの子どもたちの参加が期待されています。二〇〇三年にはこのアガリジョーのガジュマルが沖縄県の名木として選ばれました。



チビチリガマのブロンズ像



シムクガマ